

県外派遣審判員報告書

作成日 H30年 6月 19日

大会名	九州高等学校バスケットボール大会	会場	シーハット大村
期間	H30. 6. 15 (金) ~ 17 (日)	報告者	隈元 ゆみこ
スケジュール			
期日	内容		場所
6月15日(金)	18:00~	フィットネステスト	シーハット大村
6月16日(土)	8:30~	審判会議	
	9:30~	1回戦 精華女子 対 佐賀清和	
	15:30~	2回戦 小林 対 糸満	
6月17日(日)	9:30~	準決勝 小林 対 東海大学付属福岡	
レクチャー・審判会議の内容			
<p><審判会議内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・長崎県専門部長より 健康を第一に、そして、選手のために2日間よろしくお祈いします。 ・長崎県審判委員長より JBAの改革によりD-Fundでの初めての大会です。何かとご不便をおかけすることもあるかと思いますがよろしくお祈いいたします。また、部長の話にもありましたように、健康第一、そして選手のために、よろしくお祈いいたします。 ・ブロック長より代表者会議伝達事項等について ベンチで指揮をとる人について、はっきりすることとプレイヤーの管理について ベンチに入れるメンバーについて、トレーナーについて 体調管理について（2ゲームの割り当てのため、無理をされないように） 割り当てについて（同県を担当することがないように対応したいと考えている） ・諸連絡 			
実技	割り当て	1回戦 精華女子 対 佐賀清和	CC-U1-U2 相手 森田（長崎A）、峰（長崎B）
<p>○ゲーム前（プレカンファレンス） ローテーションを積極的に行うこと、自分のプライマリエリア・アングルでの判定をガイドラインにそって積み重ねていくこと、新ルール（トラベリング、UF）への対応、ショットクロック、タイマーの管理について、3or2、OOBの協力、オールコートプレスへの対応について（バックコート2PO）等基本的なことを3人で確認した。</p> <p>○ゲームの実際 EOP、EOGについて、PGCで確認をしていたものの、実際のゲームにおいては誰がプライマリであったのか、笛をならすべきだったのが曖昧になっていた。前半、精華女子のインサイドに対する佐賀清和の守り方について整理すべき場面があった。悪い手の使い方については、早い段階でテンポセッティングできたが、ダブルコールの際に誰がレポートに行くべきだったか曖昧な部分があった。ローテーションについてはPGCで確認していたので比較的スムーズに積極的に行っていたが、やはりタイミングがズレてしまうとそのあとのトランジションに影響してしまう場面があった。</p> <p>○ゲーム後（ポストカンファレンス） 主任 松本 究（佐賀県S級） EOP・EOGで誰がプライマリなのか曖昧で、2人が鳴らしてしまっていたり、鳴らすが遅れたりということがあった。アイコンタクトだけでなく、しっかりジェスチャーで示しあい、はっきりさせることが必要。そして、時計をもったら最後まで持ち続けること。（1P、2PのEOPを映像を見て、誰がプライマリだったかを確認した）また、OOBの訂正の仕方について、Lが先に示したものが違っていたのであれば、その後の訂正については、CがLのところへ行って協議し訂正するという手順が大切。ブロックorチャージ、後方からのリバウンドについては整理が必要であった。特に大きなインパクトがあるものについて（2つのケースについて映像を確認）は、判定すべきであった。 プレゼンについて、ショットファウルの際の示し方は良かった。ディレクションの出し方については、まっすぐ伸ばしきってしまうと力が指先から抜けてしまう感じに見えるので、改善すると良いと思う。（伸ばしきらず止める）</p>			

実 技	割り当て	2 回戦 小林 対 糸満	CC・U1・U2	相手	佐藤（長崎S）、一瀬（長崎B）
<p>○ゲーム前（プレカンファレンス）</p> <p>プライマリエリア・アングルの確認、アングルをとるための動きの工夫、チームの特徴について、特にインサイドに対する守り方やリバウンド争いについてしっかり見極めをすること、Cサイドにボールが運ばれてくる際のL、Tの動き（ローテーションの仕方）等について確認した。</p> <p>○ゲームの実際</p> <p>チームの特徴について話をしていたこともあって、インサイドに対する守り方やリバウンド争い、手の使い方についてどちらに対しても早い段階で示すことができた。ダブルコールになった場面においては、やはり、どちらがコールすべきだったのかということのを頭にいられておく必要があると感じた。EOPについては、1つ目の試合の反省を活かして、確認することができた。ローテーションも比較的スムーズにいったが、TとLの連動というところでは、気づきが遅かった場面もあったように思う。小林がCサイドでWチームを仕掛けてくる場面において、早めにローテーションするためのTの入りやLの動き、気づきが必要な場面があった。</p> <p>○ゲーム後（ポストカンファレンス） 主任 原田 拓朗 氏（鹿児島県A級）</p> <p>※質問形式のミーティングであった。（他のクルーにも1、2の質問あり）</p> <p>Q1：OOBの協力について、PGCではどうしていたのか？ゲームにおいて、Lから求められてCが示したにもかかわらず、ディレクションを変えてリスタートしていた場面があった。</p> <p>A1：今回の3人のPGCではその確認をしていなかった。確かに、示した方向と変えられていたが、OFF、DEFともにプレイヤーが次の準備をしており、戻すことのほうがゲームの雰囲気としておかしい感じになってしまったため、そのまま訂正せず、リスタートさせてしまった。</p> <p>⇒やはり、PGCでしっかり確認しておくことが必要。点差のあるゲームだったので何も言われなかっただけ。こういったところから崩れていってしまう原因となる。</p> <p>Wコールになったケースで、Lはローテーションをもう少し早く開始すべきだったということと、ローテーションが完了しない中でWコールであったので、Cに任せる。もし、Cが鳴らさなければCallでよかったのではということ映像を確認しながらアドバイスいただいた。</p>					

実 技	割り当て	準決勝 小林 対 東海大学付属福岡	CC・U1・U2	相手	砂川（沖縄S）、大久保（長崎A）
<p>○ゲーム前（プレカンファレンス）</p> <p>メカニクスについての基本的なことの確認（3or2、ローテーションを積極的に行うこと、EOP、EOGのクロック管理、OOBの協力等）、チームの特徴について、東海大福岡の昨日のゲームと一緒に映像確認し、東海大福岡のアウトサイドのプレイヤーに対する小林のDef、小林のインサイドに対する東海大福岡のDefについてテンポセッティングしていこうという話をした。</p> <p>○ゲームの実際</p> <p>PGCでチームの特徴について、注視すべき点について話しをしていたので、3人で早い段階からテンポセッティングすることができていた。ただ、ベンチ（東海大福岡）は、リバウンド後のコンタクトや手の使い方について多々アピールを続けていた。そんな中、2PのOOBの判定（ベンチ前）で訂正したケースについて、ベンチコントロール、クルーワークを含めて、対応が後手になってしまい（両ベンチにワーニングもしくはテクニカルファウルとすべきであった）、ベンチの信頼感を失ってしまうような原因を自分たちが作ってしまった。その後の判定についても、Basicに戻って実践したつもりではいたが、示し方、プレゼンの面からいくと、その前の出来事が影響したのではないかとベンチや周りから思われてしまうようなプレゼンになってしまっていた。後半はリセットして、3人でテンポセッティングしていったことによりゲーム自体は選手が最後まで頑張ってくれたように思う。</p> <p>○ゲーム後（ポストカンファレンス） 主任 和田 敏文 氏（福岡県A級）</p> <p>ゲームを通して、3人がしっかり判定を積み重ねており、違和感のあるものはなかった。その中で、2PのOOBの判定→訂正→ベンチコントロールについて。あの場面では、どちらに対してもワーニングもしくはテクニカルファウルを宣すべき場面であった。その際のベンチへの対応について、大久保氏より隈元氏の方が小林ベンチ近くにいたので、先に対応すべきであった。その後のプレーで最終的に24secで判定したケースについては、3secなのか24sec（3secで判定したが、24secとした）でもどちらでも良かったかもしれないが、示し方についてははっきりすべきであった。（プレゼンの重要性）ここが中途半端だったために、観ている側としてその前のトラブルが影響してしまったのか？という風に見えてしまう。Wコールの場面、誰が1番手だったか、また、そのWコールの中でいくつかクロスコールがあったので、そこについては、我慢すべきところであった。1つCサイドのリバウンドプレーでのLからのクロスコール（シングルコール）はCに任せるべき場面であった。</p>					

全体を通しての感想

この2日間で3ゲームを担当させていただき、その中での課題は、①ベンチコントロール、②クロック管理、③プライマリー。大きくはこの3つであった。①に関して、前回の西日本学生に続き、改善、準備すべき点であったとともに、今回の経験が、また自分自身の引き出しを作れたように感じた。あとは、これらをどう実践に活かしていくか。どう準備しておくかということ。②について、文言として理解していたことが、自分自身の解釈の違いであった部分と、その間違いに気づけたこと。③について、メカニクスの理解とともに実践を積み重ねることの重要性。

今大会は、JBAより宇田川氏と上田氏が来られ、ゲーム後のミーティングを拝聴する中での学び（ミーティングの仕方やメカニクスにおける考え方について）がたくさんあった。その中で一番感じたことは、新しい情報をいかにして収集し、自分のものとしていくか。そしてそれらをどう自分自身が実践し、そして、県内に伝えていくか。自分自身のレベルアップだけでなく、鹿児島IH、鹿児島国体へ向けた審判員の強化・育成のために、自分自身がコート内外で学んだことをどう伝えていくかということについて改めて考えさせられた大会であった。

最後に、大変お世話になりました、長崎県高体連バスケットボール専門部の皆様をはじめ長崎県審判委員会の皆様、そして、今回の派遣にご配慮いただきました原田審判委員長をはじめ鹿児島県審判委員会の皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。